

2011/10/22

「文字とコンピュータ」第1回例会 テーマ：インターネットと集合知

## 「情報の海の泳ぎ方——これからの『読み・書き』——」

杉山元康（編集者 兼 ライター） Twitter ID : [@FeZn](#)

[motoyasu.sugiyama@gmail.com](mailto:motoyasu.sugiyama@gmail.com) <http://www.fezn.com/>

Wikipedia [利用者： FeZn](#)

Wikipedia アドミニストレータ元管理者（稼働実績ほぼ無し）

（2004年当時としては唯一の）日本語 Wikipedia 専用テキストエディタ「[FW Wikipeditor](#)」開発

## CONTENTS

- ▷ 集合知とは何か（概説）
- ▷ これからの「読み・書き」……「向こう側に置いておく」
- ▷ 代表例としての Wikipedia（概説、利用法、評価）
- ▷ 現状の Wikipedia の完成度（中立性、信頼性 etc.）
- ▷ 集合知の利点と危うさ
- ▷ 「読み・書き」と如何に向き合うか

## 【1】「集合知」とは何か（概説）

= 「みんなの意見」を集約する仕組みと、その成果。(60年代から研究されてきた)

※インターネットは必然ではないが、「加速装置」になる。

- Wikipedia……「集合知」の代表例として挙げられることが多い。

→ここでは仮に《プロセス型》と呼ぶ。

- ある瞬間での各人の意見を投票させて、その平均を取る方法も。

→ここでは仮に《投票型》と呼ぶ。

→（現代の技術では）数値ぐらいしか出せない。

※集合知は簡単に抽出・駆使できるものではない。私たちが暮らす「民主主義社会」の現状が実例の一つ。→※詳細は後述。

## 【2】これからの「読み・書き」→「向こう側」に置いておく

- 「読み書き」＝「リテラシー」

→情報化時代の読み書き＝「情報リテラシー」

- 「向こう側」……最近のバズワード（流行り言葉）で言うなら「クラウド」

→そんな言葉を使わずとも、ウェブは（そもそも）そういう空間。

- かつて……「知識」＝「暗記していること」

- 現 代……「知識（情報）」＝「Webの海に散在」

脳内に収納しておかなくても、逐次検索すればよい。

……無線常時接続時代。

### 【3】集合知の代表例としての Wikipedia

- WikiWikiWeb……Web で「読み・書き」できるツール。(HTML は「読む」重視)

→それと同等の機能を持つソフトウェアが MediaWiki

→それを用いて「皆で」作られている百科事典、それが Wikipedia。

※「作られた」ではなく「今も作られ続けている」

- 調べる、編集する、新規作成する。(時間があれば実演)

- ユーザー登録の方法と必要性。

→ウォッチリスト、フル機能、投稿履歴管理……あと、IP アドレス隠匿なども。

& 議論のしやすさ……「集合知」を活用するためには重要。

- Wikipedia 利用に当たっての心得

→まずは公式ガイドを参照。

→<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:ウィキペディアに参加する>

- 書くという学習

→書くことで自らも勉強する

→書くことは、自らが勉強する最良の方法の一つ。

他者に何かを占めそうとすると、漠然とした理解では居られない。

「教わることは、教えること」

(古くから言われる格言)

## 【4】現状の Wikipedia の完成度

- 中立性（Wikipedia の編集指針）
- 信頼性 etc.

→どちらも「記事（項目）によって異なる」

「編集合戦」と呼ばれる論争なども起きる。

→記事の「履歴」や「ノート」を参照する。

……その文書（記事／項目）が形成された経緯を辿ることができる。

- 問題ないように見えても「これ（Wikipedia）だけ」を参照しない。

→これは、いかなる情報源であっても同様。

（書籍、伝聞などを含む）

※「出典」の記載があるだけで一見正しく見える。

→そのリンク先を読まない人が多い。

→きちんと記載内容を確認すべき。

(2011/10の現状：多くの項目で、まともな出典が載っている模様)

・参考：「Webは51対49で善意が勝つ世界」(梅田望夫)

→執筆者・参加者の多い記事は比較的「中立的」「多視点的」が達成される。

→その文体・姿勢・スタイル自体が気に入らないというのなら、それは「その人にとってWikipedia自体が合わない」と言える。



## 【5】集合知の利点と危うさ

### 《投票型》

#### 【利点】

- ・ 専門家以上に正確な答えを導く

→ある問題に関して無知な人から博識な人まで幅広く意見を集めて平均値を取ると、専門家と同等あるいはより正確な結果を出す。

(ゴルトンの実験：家畜見本市で素人集団の出した「あの牛の体重は？→1197 ポンド。

実測値 1198 ポンド。という事例など。『「みんなの意見」は案外正しい』 p06 ほか)

(※スロウィッキーによる本書では Wikipedia 以外の例、Wikipedia 台頭以前の例などが多数掲載。成功例も大失敗の例も。)

「専門性と正確性には相関は見られない」(前掲書 p59)

## 【危うさ】

- ・ 専門家の意見と異なり、「その結論に至った理由」がわからない。

(前掲書 p339、山形浩生の解説)

- ・ 「専門家以上の精度」というが……

→各個人が他者の意見を参照できる環境だと、その条件が崩れる。

- ・ 均質な集団→意志決定者たちの世界観や考え方が似通ってくる。

→「集団思考」に陥りやすい。

※均質な集団＝多様な集団よりも遙かに強固。

→集団の結束が強くなる。→集団の意見を無謬視するようになる。

(前掲書 p64)

→いわゆる「**確証バイアス**」(一度信じた結論を裏付ける情報のみ選択し、都合の悪い情報を無視する心理的かたより)に。

## 《プロセス型》

### 【利点】

- ・情報の塊（記事、文章）の形成プロセスが可視。  
→「その結論に至った理由」が追跡可能。
- ・広く成果を公開しつつ、その成果を常にアップデートできる。

### 【危うさ】

- ・「集団極性化」→見解を共有する人間の集団が話し合うと、集団の平均値ではなく、かなり極端な結論に至りやすい。（『リスク』 p.173）  
→→こういった点に注意して取り扱えば、危険性よりも利点が上回る、と考えられる。（かつ、それが世界の潮流）

## 【6】「読み・書き」と如何に向き合うか。

……………テーマとして掲げておきながら半ば放棄。

- ・扱うには難しすぎ、見解およびその根拠は、各個人の立ち位置に依存。  
→しかし「読むこと」&「書くこと」≒「考えること」……から考える。
- ・印刷された文字＝確定された文字。紙の本＝確定された知。  
→＝Web時代の(ネットワークに接続されたコンピュータの)「知」は、「外部化」された「不定形」な「知」。

- ・『「みんなの意見」は案外正しい』  
→あくまでも「絶対正しい」ではなく「案外正しい」  
→「うまく引き出して活用するにはそれなりのコツがいる」  
(『みんなの～』 p337、山形浩生の解説)

(ここで少し、集合知と民主主義の話)

- ・前半で、我々の住む民主主義社会が、「うまく機能していない集合知の事例」であるかのような書き方をした。……が、
  - 「民主主義は最悪の政体である。これまでに登場した他のあらゆる政体を除けば」(チャーチル)
  - 「健全な市場が価格をとおしたローカルな知識の絶え間ない流入を必要としているのと同じように、健全な民主主義も投票をとおした情報の絶え間ない流入を必要としている。その情報は専門家の世界にはない情報なので、専門家からは得られない。だからこそ民主主義は多様であり続けられる。」(『みんなの～』p325)

・ 「読み」に対して必要とされる態度はおそらく

→ 「信頼せよ、しかし検証もせよ」（前掲書、p.165）

・ 新時代に於いては、 誰もが「書く人」となる。

→ 自分の知識を高める行為（← Blog や Twitter などを含めた情報発信、Wikipedia への参加など）が、Web 全体の情報量の増大に寄与している。……そのことに対し自覚的になるべき。

→ 私的なメモでも、Web にあれば Google によって検索され、誰かの脳に「読み」を経て取り込まれ、知識や意見の形成に関与するかもしれない。

→ 常時接続時代の私たちは、互いに影響を与え合う「情報の海の、一滴の水」であり、それが新時代の「読み・書き」そして「知」の状態、自我の状態と言い得るかもしれない。

## [主要参考図書]

『「みんなの意見」は案外正しい』

2004、ジェームズ・スロウィツキー 日本語版：2006 角川書店

『リスクにあなたは騙される 「恐怖」を操る論理』

2008、ダン・ガードナー 日本語版：2009 早川書房

『ウィキペディア完全活用ガイド』（Wikipedia 内に[本書自体の項目](#)あり。）

2006、吉沢英明（Diagraph01） 発行元：株式会社マックス